

医家エルヴェシウスの名声と

哲学者C・A・エルヴェシウスの生い立ち

——評伝　エルヴェシウス家の人々（その六）——

永治日出雄

第二節　ルイ十四世臨終のヴェルサイユと哲学者エルヴェシウスの出生

(一)

凄惨な冬一七〇九年に献身的な医療活動を行ったジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは、翌年セーヌ左岸の清楚なサン・セヴラン教会で美しいジュヌヴィエーヴ・ダルマンクールと結ばれた。この教会に保存された古文書のなかには、一七一〇年の記録としてつぎのような婚姻証書が見出される。⁽¹⁾

八月二七日水曜日オルレアン公侍医アドリアン・エルヴェシウスと同夫人デグランジュの子息ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウス（医学博士、二五歳）、ならびに軍事特別財務官アントワーヌ・ド・カルヴォワザン・ダルマンクールの子女ジュヌヴィエーヴ・ド・カルヴォワザン・ダルマンクール（十九歳）は、

婚姻の手続完了と正式に公示されたあと、本教区に属する信者として厳かに結婚の式典を挙げた。法令に定められたとおり、この婚儀には新郎新婦の住所、カトリック信仰、権利を立証できる立会人が列席した。⁽²⁾

なお、その時代に刊行された『モレリ大歴史辞典』によれば、ダルマンクール一家はドイツ領トラーエンの代官であった。そうした伝承を手掛かりとして、『エルヴェシウスとその生涯と著作』の著者カーンは、新婦ジュヌヴィエールの父祖がフランスから追放されたプロテスタントであり、ルイ十四世によるドイツ占領の際ヴェルサイユに登用されたのではないかと推察している。⁽³⁾

オルレアン公侍医である父の配慮により、ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは一七一三年からルイ十四世の季節侍医に就任した。(以下この人物を宮廷医エルヴェシウスと略称する。)当時国王に仕える医師団には侍医長および専任侍医のほか、季節侍医八名と顧問侍医八名も含まれた。季節侍医は春夏秋冬のいずれかを担当し、普通はその時期だけヴェルサイユに出仕した。したがって、就任以後も宮廷医エルヴェシウスはバリーに居住して民衆の診療を続け、フランス各地における防疫活動にも尽力する。カルチエ・ラタンのセルバント街で育った彼は、結婚後両親から独立し、セーヌ右岸のサン＝ポール教区、グレーブ広場周辺のジェフロワラスニエ街に新居を構えた。⁽⁴⁾

宮廷医エルヴェシウスと妻ジュヌヴィエールの間にはまず長女が生まれたが、一七一四年年五月二日わずか二歳四ヵ月で世を去る。ついで一七一五年一月に長男が呱呱の声をあげ、サン・セヴラン教会で洗礼を受けた。これが啓蒙思想家クロード・アドリアン・エルヴェシウスである。(以下この人物を哲学者エルヴェシウスと略称する。)⁽⁵⁾サン・ランベールによる伝記『エルヴェシウスの生涯と作品』には、この哲学者の両親と出生について以下のとおり書かれている。

クロード・アドリアン・エルヴェシウスは一七一五年一月ジャン・アドリアン・エルヴェシウスとガブリエ

ル・ダルマンクールの子としてパリで生まれた。〔中略〕父エルヴェシウスは美しい妻を深く愛し、妻もまた夫を慕い、夫のあらゆる勤めを尊重した。ふたりは息子を熱愛し、その教育に心を傾けるとともに、幼少時代を幸福に送らせるよう配慮した。⁽⁶⁾

親友であったサン・ランベールも、クロード・アドリアン出生の日付については明示せず、両親の名についても不正確である。しかし、『名門エルヴェシウス家―国王の施療』を執筆したルイ・ラフォンは、パリ国立図書館に蔵される古文書によって哲学者エルヴェシウスの誕生日が一七一五年一月二六日であることを確認している。研究者アーン・カミンクの調査によれば、この嬰兒の洗礼は、一月二八日に祖父の教区、サン・セヴラン教会で行われた。⁽⁷⁾

「誕生した瞬間から逝去する瞬間まで私たちの生涯は、長い教育の連続である。」この命題は哲学者エルヴェシウスが提起した重要な理論のひとつである。彼は人間形成における乳児期の意義について、晩年の著作『人間論―人間の精神的能力と教育』でつぎのように述べる。

子どもが最初の教育を授けられるのは、動きと生命を得た瞬間からである。ときには母胎においてすら健康であるか、虚弱であるかを自覚する。いずれにしても母親は出産し、子どもは手足を動かし、泣き声を発する。空腹になれば、苛ら立ち、欲求を感じる。こうした欲求によって子どもは唇を開き、乳房を握り、貪るように吸う。数カ月のうちに眼は見開き、さまざまな器官が強くなり、徐々にあらゆる印象を受け入れるものとなる。こうして視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚、ついに魂のすべての扉が開かれる。このとき自然のありとあらゆる事物が大挙して馳せ参じ、こどもの記憶に無数の観念を刻み込む。このような早期の歳月においてだれが子どもの真の教師であるか。子どもが経験する種々様々な感覚にはかならぬ。そうした感覚のひとつひとつが教

育なのである。⁽⁸⁾

やがてフランスの啓蒙運動に結集する多くの思想家も、クロード・アドリアンの生誕と前後して次々と出生した。つとに一六八九年モンテスキューがポルドーの帯剣貴族として生まれ、三年間乳母の家で養育される。ヴォルテールの生い立ちに謎を含んでいるが、一六九四年に出生してサン・ミッシェル界限のサン・アンドレ・デザール教会で洗礼を受けた。十八世紀に入ると一七〇七年に植物学者ビュッホン、その翌々年に唯物論者ラ・メトリーが生まれる。ジュネーヴにおけるルソーの生誕は一七二二年、ラングルにおけるデイドロの生誕はその翌年である。これまで哲学者エルヴェシウスと同じ生年とされたコンディヤックは、一七一四年十月一日グルノーブルの名家に生まれた。まもなく一七一七年の晩秋ノートル・ダム大聖堂に近いサン・ジャン教会の石段で嬰兒ダランペールが捨て子として発見される。⁽⁹⁾

(二)

一七一五年八月十日ルイ十四世は朝から胃部の痛みを感じ、国王侍医長のファゴンが竜涎香酒一回分を処方した。しかし、大理石像の建立を視察するため、太陽王はマルリーの庭園に出かけ、夕方ヴェルサイユ宮に帰る。夜はマントゥノン夫人のもとで過ごしたが、ひどく口が渴き、眠れなかった。その後も病をおして公務を続けたが、八月十三日の夕刻左足に激痛が生じ、歩けないほどになった。急遽マントゥノン夫人は主席外科医マレシヤルを呼び寄せる。ルイ十四世は湿布をして床に就き、医師団と侍従が国王の居室に泊まった。⁽¹⁰⁾

同月十四日にはバリ在住の医家が招集され、年長者から順に脈を取った。以後も国王は礼拝堂でのミサに臨席し、國務顧問會議をも主宰するが、十九日には高熱と鬱血の状態となった。病状を憂慮して二二日さらに十名の医家がパ

リからヴェルサイユへ赴く。⁽¹¹⁾こうして今際の床で太陽王を診察した宮廷医のなかに、ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスも見出される。⁽¹²⁾『十八世紀パリの医学界』の著者ドゥローネは左記のとおり述べる。

ルイ十四世は一七一五年八月十一日から病に罹った。すぐに左足の症状として老人性・糖尿性の壞疽が現われた。マレシャルとファゴンはふたりのファルコネ、ゲリー、モラン、子息エルヴェシウス、等々の診察を徴したが、無駄であつた。施すすべもない。プロヴァンスの経験医がブランと名乗りいで、壞疽に卓効あるエリキシル剤の服用を進言した。ブランの提案は受け入れられる。国王はエリキシル剤をまず十滴口にし、さらに十滴飲む。いっとき気分がよくなった。官女たちほどの医学博士にも愛想をつかし、秘法を明かす男だけを見守った。メーヌ公妃がダニヤンの療法をも勧める。万事休す、と悟つて侍医たちは反対しなかつた。⁽¹³⁾

八月三十一日壞疽の症状が腿まで拡がり、聖職者の祈りを受けながら国王は意識を失つた。ついに一七一五年九月一日午前九時ルイ十四世はヴェルサイユ宮御寢の間で崩じ、七七年の生涯、七三年の統治を終えた。国王の遺体は大広間で一週間供養されたあと、パリ東北のサン・ドニ大聖堂に葬送され、ブルボン王家歴代の墓地に安置される。その日二十歳のヴォルテールは葬列を見送るサン・ドニの沿道にいた。⁽¹⁴⁾後年王室修史官をも勤めた彼は、太陽王の臨終について貴重な証言を遺している。

よく知られているとおり、ルイ十四世は死の接近に毅然として臨み、マントノン夫人に仰せられた。「死ぬことがもつと難しいと思つていた。」また、侍従にもたしなめた。「なぜ泣くのか。余が不死である、と信じていたのか。」そして、さまざまな事柄、己の葬儀についてさえ自若として指示を与えた。(中略)臨終におけるルイ十四世の剛毅さには、生涯示し続けた誇張が消えている。病床の国王に抱かれ、遺訓を授けられた後継者「ルイ十五世」は、その覚書をいつも座右に置いていた。この遺訓はどの歴史書でも正しく伝えられていない。

忠実な複写をここに掲げておく。

「そなたは偉大な王国の王位にまもなく就く。神に対する義務を怠らよう、とくに心掛けてほしい。すべて神のお陰で今日そなたがあることを、忘れてはいけない。隣国との平和を維持するよう努力すること。余は戦争を好みすぎた。こうした点で余を真似てはならない。出費が多過ぎた点も同様である。万事人々から意見を求め、最善のものを選び、実行するがよい。できるだけ早く人民の負担を軽減してほしい。残念ながら余自身が実現できなかった事柄を、そなたが行うように。」〔中略〕

その生も死も輝いていたので、ルイ十四世はもつと愛惜されてよかった。新しいものを好むのが人情と言えるし、未成年の国王を迎えれば、出世の道が開けるかもしれぬ。そのうえ〔ジャンセニスム反対の〕大勅書をめぐる争闘で人々は苛立ち、国王の訃報にもつれない反応しか示さなかった。*

* (原註) 私はサン・ドニの沿道に小さな天幕が立つのを見た。そこで人々は酒を飲み、唄を歌い、笑っている。パリ市民の感情が下層民にまで浸透していた。なによりもイエズス会士ルテリエへの憤懣が、こうした歎息を行き渡らせた。葬儀を照らす松明で、イエズス会士の邸宅を焼こう、と何人かの観衆が叫ぶのを私は聞いた。⁽¹⁵⁾

ルイ十四世の晩年は肉親の相次ぐ死で暗鬱にされていた。一人息子である王太子は一七一一年天然痘のため五十歳で逝去した。国王の孫にあたり、新たな王太子に擁立されたブルゴーニュ公は、その翌年猩紅熱で死ぬ。猛威をふるう伝染病はブルゴーニュ公妃とその長男ブルターニュ公の命をも奪った。また、ブルゴーニュ公の弟ベリー公も長く病床にあったが、一七一四年後継ぎのないままに歿した。こうしてブルゴーニュ公の遺児で太陽王の曾孫にあたるダンジュー公が、わずか四歳でルイ十五世として即位する。幼少の国王を補闕する摂政には、ルイ十四世の甥フィリッ

ブ公が選ばれた。⁽¹⁶⁾

ヴェルサイユ宮で繰り上げられる栄華の陰で、圧制と搾取が国民を辛苦させ、戦争や災害が社会を疲弊させていた。ルイ十四世の葬送と新たな統治者の登場が、時代の転換を期待させたことは当然である。太陽王逝去をめぐる一般の反応は、さきに引用したヴォルテールの証言からも推察できるが、サン・シモン公爵の「回想録」は一層詳細で辛辣である。

廷臣の反応はふたつの種類に分かれた。ある人たちは抜擢され、政務に係り、出世することを望んでおり、待っても無駄な時代が終わったのに歓喜した。また、ほかの人たちは国王よりもむしろ諸々の大臣から重い桎梏に押し付けられ、つねに耐えがたいほどであったため、開け放たれたような快さを実感した。いづれも不断の圧迫から解放され、新たなものを好んだわけである。すべてを束縛される隷従に疲れはてたバリは、自由への希望を得て再生し、ほしいままに濫用された権力が崩れるのを見て喜悅した。絶望的なまでに荒廃し、破壊された各地方も狂喜して甦り、勅令と移審によって無力にされた各地の高等法院や司法機関が、審理を開始したり、拘束を解かれたりした。荒し回られ、踏みつけられ、絶望的にされていた人民は、最大の希望が成就したと確信して、解放の炎を燃え立たせ、神に感謝の祈りを捧げた。⁽¹⁷⁾

第二節 哲学者エルヴェシウスの幼時と年少の国王ルイ十五世の罹患

(一)

哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスの主たる功績のひとつは、人間形成における環境と教育の重要性を洞察したところにある。¹⁸ 彼によれば、各人の能力や性格を定める要因は、意図的な訓練や教育だけでなく、幼時から多種多様な人生経験、人間関係、社会的環境である。三四歳のとき刊行した処女作『精神論』のなかで、彼の思想の核心はつぎのように表現される。

同一の場所において同一の教師によって行われるものとのみ、(教育) という言葉を理解すれば、教育はきわめて多くの人々に同一となる。

しかし、この言葉に一層正しく、広い意味を与え、私たちの教育に役立つものすべてを包含させるならば、なにびとも同一の教育は受けない、と私は言おう。なぜなら、各人は己れを支配する政治形態、友人や愛人、己れを取り巻く人たち、読書、偶発性もみづからの教師とする。なお、私たちが無知であるため、相互の連関や因果が不明である無数の出来事を偶発性と呼ぶ。この偶発性こそが一定の事象を私たちに眼前に提供して、斬新な着想を可能にし、ときには偉大な発見へと導く。¹⁹

哲学者エルヴェシウスの著述は人間の社会的・政治的側面に重点が置かれ、ロックの経験論を敷衍した人間形成の原理に貫かれている。それでは、環境と教育の意義を強調する思想家自身が、どのような家庭や境遇や地域のもとで

育つたであろうか。すでに私たちは哲学者の父祖について綿密に考究し、彼の家庭的環境を明らかにしつつあるが、ここでは幼きクロード・アドリアンの地域的環境を検討したい。

哲学者エルヴェシウスが生まれたジェフロワラスニエ街は、パリ市庁舎の裏手界限に位置し、サン・ポール寺院に至るサン・タントワヌ街から発して、グレーヴ河岸（現在の市庁舎河岸）に通じた。この小路は早くも一三〇〇年頃より存在し、一四五一年トルーシエによって作成された『パリ市街図』には今日と同じ町名で記載されている。十三世紀の都市ブルジョアであるフォルジェ・ラスニエに因んで命名され、短く狭い街路にラシヤ製造業者や染物業者が多く連なつた。なお、織物業の振興は重商政策のひとつに数えられ、財務総監コルベールの父親もランスのラシヤ製造業者である。哲学者エルヴェシウスの生家がどの番地にあつたかは、残念ながらどの文献にも記されていない。⁽²⁰⁾

ジェフロワラスニエ街にはいままも由緒ある邸宅がいくつか現存し、花葉と壺を彫刻した門や、イオニア風の欄干を付した石段が眺められる。なかでも二六番地のシャロンリュクサンブール館にはロベール・アルノーダン・ディー夫妻が住んだ。ロベールの父親アントワヌ・アルノーはパリ高等法院の次席検事であり、イエズス会士に抗してソルボンヌの擁護を行った。また、アルノーダン夫人の父親アントワヌ・ルフエーヴルラポルドリは国務顧問官と駐イギリス大使の要職を勤め、詩文をも練る才人であつた。アルノーダンディーには九人の弟と妹があり、著名な大アルノー（アントワヌ・アルノー）をはじめ、やがて一族の多くがポール・ロワイヤウの信仰生活に入る。なお、ジェフロワラスニエ街一七番地にはナチズムの犠牲となつた無名のユダヤ人を追悼して、一九五六年に記念碑が立てられた。⁽²¹⁾

セーヌ河を隔てて、近くには静寂なサン・ルイ島が浮かび、彼方のシテ島にはノートル・ダム大聖堂、パリ治療院、コンシユルジュリーが聳える。そもそもパリの発達と繁栄はセーヌ河を利した水上運輸に依拠し、河畔の船着き場は

住民に物資を供給する基地であつた。たとえば、グレーヴの港では小麦、からす麦、木炭、木材、タバコなどが陸揚げされ、ルーヴル宮に近いサン・ニコラスの港へはノルマンディ、プロヴァンス、さらにはオランダから石鹼、油類、ミカン、リンゴ、鱒、鯨、コーヒー、葡萄酒などが輸送されていた。⁽²²⁾

一七六五年に刊行された『百科全書―諸々の学問・芸術・枝芸に関する合理的辞典』第十一巻でシュバリエ・ド・ジョクールは項目（パリ）を執筆し、首都の経済生活におけるセーヌ河の重要性を認識させる。

パリを貫流するセーヌ河はいくつかの橋の下を通る。ポン・ヌフ橋はそれらのなかでもっとも美しく、長さも大きさも際立っている。〔中略〕

パリの位置は非常に恵まれたものである。四つの河川、すなわちイオンヌ河、セーヌ河、マルヌ河、ワーズ河がもつとも肥沃な地方の物資を運んでくれる。ポースの穀倉地帯はパリからほとんど手の届くところにある。パリを發して、たえず蛇行するセーヌ河は、百里あまり迂回しつつ、四二里たらず離れた大海に達する。したがって、セーヌ河を遡るのは容易であり、ノルマンディーや海の産物と資源が輸送される。生活に必要な物資が潤沢にあることから、パリには民衆が満ち溢れている。王侯の邸宅、ヴェルサイユへの便宜、閣僚への縁故、奢侈贅沢、情事悦楽。これらによって人口の増加が促され、止まるところを知らない。だから、パリは王国のいかなる地方よりも多くの学者や大芸術家も擁している。⁽²³⁾

十七世紀フランスの版画家ジャック・カローヤガブリエル・ペレルの作品は、こうしたセーヌ河畔の活況を美事に描写している。兩岸を結ぶ橋は少なく、建造物も密集してはいない。しかし、水上を行き来する大船小船は、眺める者を飽かせない。漁船、客船、立派な帆を張る船、産物を満載した船。岸边では仲仕や衛士が船荷を運び、市場と出店のまわりは人出で賑わつた。⁽²⁴⁾

首都を象徴するパリ市庁舎も、セーヌ河を航行する水運業者に起源を持つ。十二世紀中葉にルイ七世はグレーヴ河岸の一部をパリの商業ブルジョアに売却した。水路を占有していた彼らは、この河畔に運輸と交易の基地を造り、組織の結束や物資の貯蔵のため堅牢な建物を築いた。以後首都の命運を定める市庁舎として、数奇な歴史の変遷を閲し、フランス革命、パリ・コミューン、対独レジスタンスなど幾多の動乱の舞台となった。⁽²⁵⁾

市庁舎の正面にあるグレーヴ広場では国家的な行事や祭典が催されるとともに、犯罪者と政治犯が処刑された。また、そこには仕事を求める失業者が早朝から蟬集するのが常であった。グレーヴというフランス語がストライキを意味するのは、こうした事実⁽²⁶⁾に由来する。また、フランス革命が勃発した一七八九年には首都の婦人たちがこの広場に集結し、パンをもとめてヴェルサイユ宮へ行進する。パリのあらゆる街路について綿密な考証を行った、ジャック・イレレはグレーヴ広場の行事や情景について記述する。

毎年〈聖ジャンの火〉と呼ばれる大祭がこの広場で壮麗に挙行された。前夜には市役人が十字架塔とセーヌ河の間に高さ十メートルもの旗竿を立て、その周りに柴の束を積んだ。旗竿は花束や花模様で飾られ、二十四の猫と一匹の狐を入れた大きな布袋がときには結びつけてある。花火、火具、火矢、数門の大砲は河に向けて置かれている。トランベットが国王の到着を告げるや、パリ市長と市役人が旗竿のほうに進み、奉呈された松明で国王が点火する。柴の束、猫と狐が燃え上がり、花火が閃光を放ち、爆竹が炸裂したあと、市庁舎の大広間にお歴々を招いて、晩餐会が開かれる。やがて市庁舎のなかで公式の舞踏会、広場においては民衆の舞踏会が催される。ルイ十一世が一四七一年六月十四日国王として初めて聖ジャンの火を点じた。アンリ四世は槍、鉞、剣、大砲に囲まれた軍神の画像に火を付けた。ルイ十四世は一度だけ十歳のとき点火した。ルイ十五世およびルイ十六世はこれを行わなかった。

とはいえ、グレーヴ広場はなによりも処刑の場所であった。執行の方法はきわめて多様であり、民衆には絞首刑、貴族には斧か剣での斬首、異端者や魔女には火刑、大逆罪には四裂きの刑、そのほかには車責めの刑などが適用された。こうした処刑のなかには非情な細工を施して一層残酷なものにされたものもある。たとえば、火勢を強めるために、罪人の足元に獣油を流した。反対に炎が迫る瞬間、罪人を硫黄で覆い、即座に窒息させる。あるいは火薬の小袋を罪人の胸に掛け、爆発によって早く解放されるようにした。

グレーヴ広場で最初に処刑されたのは、マルグリット・ポレットという女性とボーヴェの聖職者、そしてユダヤ人である。彼らは異端の罪で告発され、美貌王フィリップによって一三二〇年の聖霊降誕大祝日火刑に処せられた。〔中略〕この〈処刑広場〉で行われたほかの死刑執行を列記してみよう。〔中略〕一六七六年ブランヴィリエ侯爵夫人、斬首および火刑、一八八二年ラヴォワザン、火刑、一七二〇年ホーン伯爵、強度の車責めの刑、一七二一年カルトウーシユ、強度の車責めの刑、一七五七年タミヤン、四裂きの刑、一七六六年、ラリ伯爵およびトールレンダー男爵、斬首、一七九〇年ファウラ侯爵、絞首刑。

このような死刑執行の際には群衆が集まり、廷臣も民衆も広場に群がった。屋根の上まで人出で黒くなっていた。⁽²⁷⁾

こうして哲学者エルヴェシウスはフランスにおける経済、交易、政治、司法の中心地で幼時を過した。生家から至近の距離にはセーヌ河、パリ市庁舎、グレーヴ広場があり、カルチエ・ラタンにある祖父母の家やがて入学するコレージュ・ルイ・ルグランへ行くたびに、ノートル・ダム大聖堂やバリ施療院や司法官を眺めたはずである。しかし、幼少のエルヴェシウスについてはサン・ランベールによる以下の記述以外にほとんど史料が発見できない。

五歳になるまえに、両親はエルヴェシウスをランベール氏に委ねた。聡明で心優しい人物であつて、長生き

をし、教え子の死をいつまでも悼んだ。

このような家庭教師に好まれるよう、生徒はすすんで従った。早くからエルヴェシウスは読書を愛した。たしかに最初は童話やお伽話しか好まなかった。しかし、まもなくラフォンテーヌとボワロー⁽²⁸⁾デプレオーさえ読んだ。ボワローの著作は趣味ある大人を惹きつけるものの、子どもには面白くないが……。

なお、二十世紀初頭に精細な評伝を執筆したカーンによれば、パリ在住のマン侯爵はエルヴェシウス家の末裔であり、邸内の書齋に哲学者五歳の肖像を保存していた。宮廷医ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスに伴われ、アンヴァリッドの礼拝堂でトルコ大使と会見した画像である。⁽²⁹⁾

(二)

摂政に就任したオルレアン公は高等法院と名門貴族に支えられ、独裁的な政權に批判的なサン・シモン公爵を摂政諮問会議に参画させた。太陽王の遺言によつて年少のルイ十五世は、緑に囲まれたヴァンセンヌ城で育てられる。ジャンセニストに係りのあるドタールが国王侍医長に登用され、ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスも季節侍医に再任された。⁽³⁰⁾なお、父である経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスは一七一七年よりオルレアン公の主治医を勤めた。

一七一九年のフランスは十年前の凄惨を想わせる災厄に襲われた。パリでは一年間に三三〇ミリ、六月と七月に一〇ミリの雨しか降らず、旱天と猛暑が人々を憔悴させる。河川の水量が激減し、田園では穀物の生育が不良となった。こうした状況のもとで伝染病も猖獗をきわめ、首都では天然痘で二万四千の生命が、フランス全土では赤痢だけ四十万の生命が奪われる⁽³¹⁾。この時期にヴァンセンヌ城では十歳の国王が重病に陥り、侍医団は対策に窮していた。十

八世紀後半に上梓された『パリ大学医学部名士略伝』に以下の記述がある。

一七一九年はエルヴェシウスにとって輝かしい榮譽の年となった。国王が危険な病状となり、若輩ではあるものの、エルヴェシウスも診断に招集された。彼は思い切つて右部の瀉血を進言する。当初だれの賛同も得られなかつたが、確乎たる論拠を諄々と説いたので、すべての顧問侍医がそれに従つた。瀉血が決行され、願つたとおりの経過となつた。いわば危急を告げる場合、必要とされるのは手腕よりもむしろ勇氣である。

このような快拳のあと故摂政殿下は、国王からエルヴェシウスが離れないように希望した。宮廷がヴェルサイユに復帰すると、オルレアン公は一万リーヴルの年金と多大の恩典を彼に授け、宮中に住むよう勧めた。英明な摂政殿下の申し入れは無上の名譽であつて、即座に承知してよいものと思われた。だが、決めるまえに父親と相談したい、とエルヴェシウスは猶予を求めた。彼の慎重さにオルレアン公はますます敬服する。そして、時間の余裕を与え、熱心に懇請した。⁽³²⁾

ジャン・クロード・アドリアンの慎重な態度は、官職の獲得をめぐる複雑な問題に起因した、と評伝の著者ラフォンは推測する。一七二〇年に彼は国王専任侍医の襲職権を授与され、現職であるブーダンの後継者に指名された。また、国立古文書館に蔵される書類は、その翌年彼が国王顧問侍医に推挙されたことを伝えている。

顧問侍医資格証書

本日一七二二年七月四日パリで国王陛下は、つぎのような裁断を下された。すなわち、エルヴェシウス殿は若年の頃より研鑽を重ね、公衆に寄与するところ大である。こうした経歴は専任侍医の襲職権に適合し、国王の健康について諮問を受けるにもふさわしい。また、ほかの侍医と同じように恩恵を拜受すること、顧問侍医としてつねに身近に侍ること、みずから地位に伴う特権、榮譽、恩典を享受すること、専任侍医の職責を立派

に守ることを、陛下は希望された。なお、本月一日より俸給九千リーブルを賦与し、当資格証書によって首席顧問侍医に任命する。以上国王陛下の署名および副署によって証する。⁽³³⁾

こうして首席顧問侍医に登用されて四週間のちに、早くもジャン・クロード・アドリアンは才腕を發揮し、若き君主をふたたび救う。一七二二年七月三十一日サン・ジェルマン・ロクジェロワ参事堂に臨席したルイ十五世は、ミサのなかばで突然倒れた。国王毒殺との噂も流れ、たちまち不安が宮廷から国中に拡がる。パリ高等法院およびノワイエ枢機卿は聖ジュヌヴィエーヴ遺物箱の開示と四十時間の祈祷を命じた。³⁴この年の国王罹患に関してはサン・シモン公爵の「回想録」が貴重な史料をなす。

〔七月〕末日それまで元氣であつたルイ十五世が、目覚めのときから頭痛と咽喉痛を感じた。悪寒も生じ、午後には頭痛と咽喉痛がひどくなつたので、床に就いた。翌日の昼頃余は様子を見に行つた。苦しい一夜だつたようで、二時間前からさらに苦悶が激しくなつたらしい。宮中はどこも茫然自失の状態にある。国王御座所に上がることを、余は許されていた。御寝の間へ入ると、がらんとした部屋の暖炉脇でオルレアン公が、ひとり沈痛な表情をしていた。まず公のもとに寄り、すぐ国王の病床を見に行く。すると専属薬剤師のひとり、ブルデュックが王になにか服用するものを差し出した。このときラフェルテ公爵夫人の姿がブルデュックの肩越しに見えた。彼女は妹ヴァンタドール公爵夫人の推挙で国王の代母となり、国王御座所に上がることを許されている。ラフェルテ公爵夫人はこちらを振り返り、余の顔を見て突然低い叫んだ。「毒を盛られたのよ！毒を盛られたのよ！」「やめなさい」と余は制した。「怖ろしいことを！」彼女がさらに強く叫ぶので、王に聞えはしないかと狼狽する。余はブルデュックと顔を見合わせた。そして、国王の病床と狂つた女からすぐに離れた。ラフェルテ公爵夫人とはなんの係りもなかつた。王の病氣は五日間だけで、最初の三日間が激しかった。

この間余は大変心配し、不安でもあったが、国王傳育官になることを頑固に拒否してきたので、気楽にも感じられた。傳育官を引き受けておれば、どうなっていたか、と想像すると、慄然たる気持になる。夜中に突然目覚め、傳育官でなかったことに、無上の喜びを感じた。病気はながく続かず、恢復は早かった。こうして平静と喜悅が戻り、讚美歌と祝福の聲が宮中に満ちた。ひとり面目を施したのはエルヴェシウスである。ほかの医家は動転し、エルヴェシウスだけが沈着であった。オルレアン公を囲む協議で、彼は足部の瀉血を強く主張する。エルヴェシウスが優っていた。ただちにはつきりと効き目が現われ、王はまもなく治癒した。⁽³⁵⁾

侍医長ドゴールをはじめ、宮廷医ブーダン、ムラン、ファルコネ、ラペロニなどが困惑するなかで、ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスはマンナ液汁と催吐性酒石の服用、さらに足部の瀉血を提議した。マンナ液汁は西洋とねりこの枝葉から抽出され、胆汁を浄化する。また、催吐性酒石は酸化アンチモンと粉末酒石の混合であって、迷走神経の末端を刺激する。瀉血はブーダントとエルヴェシウスによって八月一日および八月六日に行われ、シルヴァ、ムラン、ジョリ、ファルコネなどの侍医がこれを補佐した。こうした処置によって八月二日から国王の病状は好転し、数日後にはほぼ全快した。まもなく侍医長ドゴールはこの度の国王治療について詳細な報告書を印刻させる。⁽³⁶⁾

一七二二年のルイ十五世発病は比較的軽度であったものの、謀略の疑惑や人心の動揺を招いた。そして、国王のいち早い恢復は、新しい統治者への期待もあって、常軌を逸するお祭り騒ぎを呼び起した。八月四日にパリ全市とその近郊では全快祝の花火が打ち上げられる。国王の家庭教師ヴィルロワ元帥は、首都の教会で讚美歌を数週間奏するよう命じた。また、チュイルリ庭園では職人、炭屋、水売り、車夫、鯨売りなどが、交互に歌い踊った。八月八日中央市場の鮮魚商がリボンと花で飾られた丈八フィートもの蝶鮫を献上する。八月十一日華美な装具の馬に乗った青年が、ラングドックの若者二十人ともに国王に拝謁し、バスク地方の珍奇な衣装や舞踊や習俗を披露した。⁽³⁷⁾

〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。

甲 哲学者エルヴェシウスの著作

- He1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.
HeM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1988.
Hh1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773, 2 volumes.
HhM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989, 2 volumes.
Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795, 14 volumes. (Georg Olms Verlagshandlung, Hildsheim, 1967.)
エネニメ: エルヴェシウス著『根岸国孝訳「人間論」明治図書』一九六六年。

乙 その他の主要な文献

- Ch : Ian CUMMING, *Helvetius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd., 1955.
Bh : Beatrice D'ANDLAU, *Helvetius, seigneur de Voré, Paris, Fernand Sorlot, 1939.*
Hd : Jacques HTLLAIRET, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris, Les Editions de Minuit, 1963, 2 volumes.
Hn : Jean-Christien-Ferdinand HOFFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857-1864, 46 volumes.
Kh : Albert KEIM, *Helvetius, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1907. (Stakine reprints, Genève, 1970.)
Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Helvetius, les remèdes du roi*, Paris, Octiania, 1926.
Mb : Joseph MICHAUD, *Biographie universelle ancienne et moderne*, Paris, C. Desplaces, 1854-1865, 45 volumes.
Se : Jean Francois de SAINT-LAMBERT, *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius*, dans *Hol*, tome I, pp. 1-176.

- Sm : Louis de Rouvroi SAINT-SIMON, *Mémoires*, éd. par Y. Coirault, Paris, Gallimard, 1983—1988, 8 volumes.
- Voh : VOLTAIRE, *Oeuvres historiques*, éd. par R. Pomeau, Paris, Gallimard, 1957.
- ワマル：ヴォルテール著「丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』全二巻、岩波書店、一九六四年。
- (1) Ld, p. 114.
 - (2) Acte de mariage de Jean—Claude—Adrien Helvétius, dans Ld, p. 114.
 - (3) Kh, pp. 7—8.
 - (4) Ld, pp. 106, 115. Ch, p. 7.
 - (5) Paul DELAUNAY, *La Monde médical parisien au dix—huitième siècle*, Paris, Jures Rousset, 1906, pp. 98—99.
Ld, p. 115. Ch, p. 7.
 - (6) S6, pp. 1—3.
 - (7) Ld, p. 115. Ch, p. 7. Bh, p. 28.
 - (8) Hh1, tome I, pp. 23—24. HhG, p. 57. Hol, tome VII, pp. 25—26. Hkニク p. 24.
 - (9) René POMEAU, *D'Aronet à Voltaire*, Oxford, Voltaire Fondation, 1985, pp. 19—27.
Jean SGARD, *Corpus Conditiae (1714—1780)*, Genève—Paris, Editions Slatkine, 1981, p. 31.
Ronald GRIMSLEY, *Jean d'Alembert 1717—83*, Oxford, Clarendon Press, 1963, pp. 1—2.
なな コンナニヤツクの生年「岩波西洋人名辞典(増補版)」や「ロベール固有名詞小辞典」でも一七一五年と記されて
38。
 - (10) Joseph BARRY, *Versailles, passions et politique*, traduit par J. Kamoun, Paris, Seuil, 1987, p. 152.
 - (11) Ernest LAVISSE, *Louis XIX*, Paris, Tallandier, 1979, tome II, pp. 714—715. BARRY, *op. cit.*, p. 152.
 - (12) BARRY, *op. cit.*, pp. 152—153. Ld, p. 106.
 - (13) DELAUNAY, *op. cit.*, pp. 108—109.
 - (14) Pierre VERLET, *Le Chateau de Versailles*, Paris, Fayard, 1985. BARRY, *op. cit.*, pp. 154—155. POMEAU, *op. cit.*, p. 75.
 - (15) VOLTAIRE, *Le Siècle de Louis XIV*, dans Voh, 948—949.

- 〔参考〕サトル、第二卷、二四〇—二四二頁。なお、この訳書には引用した原註の部分が含まれていない。
- (16) VOLTAIRE, *Le Siècle de Louis XIV.* dans *Voh.* 943—944. (サトル、第二卷、一三三四—一三三六頁。) LAVISSE, *op. cit.*, pp. 702—711.
- (17) *Sm.* tome V, p. 618.
 なお、ルイ十四世治下における代表的な哲学者マルブランシュが、同じ年の十月に歿する。クロード・アドリアン・エルヴェシウスが誕生した一七一五年は、思想的にも新旧交代を象徴する一年と言えよう。「十七世紀フランスの最後の形而上学者マルブランシュとアルノーが死んだその年に、エルヴェシウスとコンティヤックが生まれた。」(Karl MARX—Friedrich ENGELS, *Die Heilige Familie.* im *MARX—ENGELS, Werke*, Berlin, 1957, Band III, S.134.〔参考〕カール・マルクス＝フリードリッヒ・エンゲルス「聖家族」『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店、一九六〇年、第三卷、一三三—一三三頁。)よく知られているとおり、エルヴェシウスの思想的な意義は若きマルクスによって高く評価された。
- (18) 「おなごくロックに由来するエルヴェシウスにおいては、真にフランス的な性格を帯びてくる。彼は唯物論をただちに社会生活との関連で理解する。〔中略〕人間の本性は善であり、経験と習慣と教育が全能であり、外的な環境が人間に深い影響を及ぼし、産業が重要な意義をもち、快樂の追求は正当である——このような唯物論の教理が共産主義や社会主義にと必然的な関連を見抜くには、たいした洞察力を必要としなく」(MARX—ENGELS, *op. cit.*, Band III, SS. 137—138.〔参考〕マルクス＝エンゲルス、前掲、第三卷、一三三—一三三頁。)
- (19) *Hel.*, pp. 252—253. *HeM.*, p. 230. *Hol.*, tome III, pp. 116—167.
- (20) *Hd.*, tome I, pp. 53, 58.
- (21) *Hd.*, tome I, p. 58.
- (22) H. BERGMAN et al., *La Vie parisienne au XVIII^e siècle.* Paris, Félix Alcan, 1914, pp. 32—33.
- (23) Marcel LE CLERE et al., *Paris, de la Préhistoire à nos jours.* Saint—Jean—Angély, Bourdessoules, 1985, pp. 327—329.
 Chevalier de JOUCCOURT, Paris, dans Denis DIDEROT et Jean D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers.* Neufchâstel, Samuel Fauche, 1765, tome XI, pp. 944—945.
- (24) Paul MORAND, Paris, Paris, La Bibliothèque des Arts, 1970, pp. 36, 39, 42.
 なお、のちに哲学者エルヴェシウスと結婚するアンヌ・カトリヌ・リニサイルは、十七世紀の傑出した版画家カローの

木蘭の事など。

- (25) Jean-Jacques LEVEQUE, *L'Hôtel de Ville de Paris*, Paris, Pierre Horay, 1983. pp. 47-56. Hd, tome I, 648-650.
- (26) *Ibid.*, tome I, 648-649. LEVEQUE, *op. cit.*, pp.94-109. JUCOURT, *op. cit.*, tome XI, p.950.
- (27) *Ibid.*, tome I, 649-650.
- (28) *Se.*, pp.3-4.
- (29) *Kh.*, pp.11, 598°.
- (30) Jean-Christian PETTIFIS, *Le Régent*, Paris, Fayard, 1986. pp. 319-327. DELAUNAY, *op. cit.*, pp. 111-113.
- (31) Marcel LACHIVER, *Les Années de misère, La famine au temps au Grand Roi*, Paris, Fayard, 1991. pp.410-419, 525-528.
- (32) Jacques-Albert HAZON, *Notice des hommes les plus célèbres de la Faculté de Médecine en l'Université de Paris depuis 1110 jus-
qu'en 1750*, Paris, Benoît Morin, 1778. pp. 211-212.
- (33) *Mb.*, volume XI, p.86. Hn, volume XXIII, p.874.
- (34) Archive nationale, 0165, fol.150. dans *Ld.*, pp.109-110.
- (35) PETTIFIS, *op. cit.*, pp.609-610. Yve COIRAULT, Notes et variantes. dans *Sm.*, tome VII, p. 1558.
- なお、一七〇九年のルイ十五世権病については史料が乏しく、サン・シモンの『回想録』本文にもコワローによる同書註
釈にも記載が見出せな。
- (36) COIRAULT, *op. cit.*, tome IV, p.766 et tome VII, p. 1559.
- DELAUNAY, *op. cit.*, p.120.
- (37) Charles KUNSTLER, *La Vie quotidienne sous la Régence*, Paris, Hachette, 1960. pp.160-161.

【補 遺】

経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスによって開発されたイペカ吐剤（吐根）は、多大の名声と栄達を同家

にもたらし、哲学者エルヴェシウスを醸成する素地ともなつた。この發明が赤痢の特効薬として現在も広く用いられることは、すでに本稿（その二）の補遺で述べた。ここでは日本における赤痢防疫とイベカ吐劑使用に関する史料を抜粋し、比較文化の見地からフランスの医学と日本の医学の相關を検討する一助としたい。

わが国においても赤痢は古来しばしば猖獗を極めたが、一八九七年篤実な若手研究者志賀潔が赤痢の病原菌を發見し、近代日本の医学陣は人類の防疫活動に画期的な進歩を促した。ここではまず赤痢菌發見の興奮に包まれた伝染病研究所（のちの北里研究所）の学界報告を収録する。

A 志賀潔による赤痢菌發見

出典：「細菌学雑誌」第二五号、明治三十年一月二十五日。七八七—八一〇頁。

論 說

本邦ニ於ケル赤痢病流行ノ状況ヲ察スルニ明治ノ初年ニ在リテハ一ヶ年間ノ患者數僅々一千人内外ニ過ギサリシカ年ヲ逐フニ從ヒ漸々増加シ、近年ニ在テハ其最モ多キハ十數万人ヲ算シ少キモ亦數万人ヲ下ラサルニ至レリ彼ノ虎列刺病ノ如キモ時々孟劇ナル流行ヲ見ルコトアリト雖モ之ヲ赤痢病ノ年々間断ナク流行スルニ比スレハ吾人同胞ノ被害日ヲ同フシテ語ルヘキニアラス此ノ如ク赤痢病ハ実ニ本邦伝染病患者ノ最多數ヲ占メ而カモ年々歳々流行ヲ来シ雷ニ病者ヲシテ懊惱セシムルノミナラス親戚故旧をして之ニ付随シテ其職業ヲ廢シ徒ラニ資財ヲ費ヤスノ己ムヲ得サルニ至ラシムルヲ以テ個人ハ為メニ家政ノ秩序ヲ紊リ国家ハ為ニ生産ノ基本ヲ損ヒ併セテ予消毒ニ関スル巨額ノ費用ヲ消耗セサルヘカラス其慘毒殆ント名状スヘカラサルナリ是ヲ以テ官民共ニ力ヲ之レカ撲滅ニ致シ拮据經營シツ、アル

ハ各人ノ夙ニ認識スル所ナリ〔中略〕

会々明治三十年ニ至リ我東京府下ニ於テモ赤痢病ノ流行アリ研究ノ好機會ヲ得タルヲ以テ我伝染病研究所付属病室ニ同病患者ヲ收容シ助手医学士志賀潔ヲシテ「赤痢病患者ノ排出物ニ存在セル細菌中学理上赤痢病々原ト認ムヘキ細菌ノ存否」ニ就テ研究ノ任ニ当ラシメタリ〔中略〕

是ニ於テ余ハ今回志賀助手ガ赤痢病患者ノ排出物中ヨリ発見シタル一種ノ細菌ハ赤痢病ト密接ノ関連ヲ有スルモノニシテ其形態等普通大腸菌ニ類スル点アルモ全別種ノモノタルヲ知レリ之ヲ腸窒扶斯患者ノ血液カ其病原ナル腸窒扶斯菌ニ向テ特異反応ヲ呈スル事実ニ徴スレハ本菌ヲ以テ赤痢病々原ナリト認定シテ誤ナキヲ信ス茲ニ志賀助手ヲシテ其研究成績ヲ報告セシムルニ方リ一言ヲ弁スト云爾

明治三十年十二月十日

伝染病研究所長 医学博士 北里柴三郎

赤痢病原研究報告 第一

伝染病研究所助手 医学士 志賀 潔

第一 緒 言

赤痢病ハ近時本邦ニ於テ最モ多ク吾人同胞ヲ荼毒スル伝染病ニシテ今明治三十年亦大ニ流行シ全国殆ント其侵襲ヲ被ラサル所ナク六月ニ始マリ十二月ニ入りテ漸ク終熄ヲ告ケントスルニ至レリ内務省ノ調査ニ依レハ初発ヨリ十二月十日ニ至ル全国同病患者ノ総数ハ実ニ八万九千四百余名ニシテ其内死者二万二千三百余名(死亡比例二四、九「プロセント」)ヲ出スニ至リシト云フ就中我東京府下ノ如キ患者七千余名死者二千余名ニ上リ其病勢一時猛烈ヲ極メタリ当

研究所ニ於テモ亦為メニ付屬病室ニ一部ヲ割キテ患者ヲ收容シ恩師北里博士ニ懇篤ナル指導ノ下ニ之カ細菌学的研究ニ従事セリ其收容患者ハ七月ヨリ十二月マテ合計三十四名ニシテ死亡八名ヲ出セリ是エ実ニ今回余カ研究ニ供セシ人員ニシテ甚タ少数ナルノ感ナキニ非スト雖モ余ノ研究ハ之ヲ以テ殆ント其目的ヲ達シタリト信ス若シ夫レ審究ノ結果猶足ラサルノ点アルヲ知覺セハ余ハ他日必ス之ヲ補足センコトヲ期ス〔中略〕

第八 結 論

以上ノ研究成績を概括スレハ左ノ如シ

- 一、三十四名ノ急性赤痢患者ノ糞便及ヒ二名ニ同患者ノ腸壁、腸間膜腺等ヨリ培養ヲ行ヒ每常欠クルコトナキ桿菌ヲ得タリ
- 二、本菌ハ独リ赤痢患者ヨリ之ヲ發見ス
- 三、本菌ハ赤痢患者快復後ノ血清ニ対シテ明カニ凝集反応ヲ呈ス
- 四、本菌ハ健康躰及ヒ他ノ患者ヨリ得アル血清並ニ諸種ノ治療血清ニハ凝集反応ヲ呈セス
- 五、赤痢患者ノ排泄物及其腹壁等ヨリ本菌ノ外赤痢患者ノ血清ニノミ凝集反応ヲ呈スルモノヲ發見セズ
- 六、本菌ヲ「モルモット」ノ腹腔ニ注射スレハ腸内出血ヲ見ルコト稀ナラス小腸及盲腸壁ニハ溢血ヲ生ス皮下ニ接種スレハ強キ滲潤ヲ起シ日ヲ経ルモノハ其中央部ヨリ膿性トナル兔ノ皮下ニ接種スルモノ之レト同ジ犬ノ胃中ニ本菌ノ培養ヲ送入スレハ粘液便ヲ泄シ小腸ノ壁ニ溢血ヲ呈ス猫ノ胃中ニ送入スレハ粘液便ヲ泄ス
- 七、人躰ニ六十度ノ温ニテ殺菌セル本菌ノ培養ヲ皮下ニ接種スレハ局所滲潤ヲ發シ熱發ヲ伴フ而シテ人躰ニ於ケル感受性ハ他ノ動物ニ比シテ頗ル強大ナリ
- 八、以上ノ性質ニ因リテ本菌ハ學術上赤痢病原トシテ誤リナキヲ信ス故ニ名ツケテ赤痢菌 *Bacillus dysentericus* ト曰

フ

九 赤痢菌ノ培養ヲ以テコレ氏法ニ倣ヒ予防接種ヲ行フヲ得ベシ

十 赤痢菌ヲ以テ動物ヲ免疫セシメ以テ其培養血清ヲ製スルヲ得ルニ至ルベシ

B 日本陸軍軍医団におけるイペカ吐剤の常備

前項で述べた志賀潔の発見によつて赤痢の免疫・予防も可能となつたが、いわゆる志賀赤痢菌とは別種の病原菌がいくつが存在し、赤痢の根絶はいまなお至難の業である。赤痢への防禦は災害や戦争の際にとりわけ重要であり、エルヴェシウス家も三代にわたつてオランダ共和国およびフランス王国の軍医総監に任ぜられた。第二次大戦における日本陸軍の赤痢罹患とイペカ吐剤常備の事例として、満州軍医団の報告を抜粹する。

イ 日本陸軍軍医団による赤痢感染調査

出典：『軍医団雑誌』（満州帝国軍医団）第二二二号、甲徳五年（一九三九年）一月一日。一一一九頁。

国軍軍官士兵ノ腸内病原体保有者検索成績

満州医科大学微生物学教室（主任北野教授）

陸軍軍医少校 渡辺 栄

陸軍軍医中校 池田 謙一

第一章 緒言

満州ニ於ケル急性伝染病中、赤痢ヲ主トシテ消化器伝染病ハ甚ダシク淫浸ヲ極メ、四時其ノ跡ヲ絶タザル現況ニアリ、コレガ防濁方策ノ完徹、猶ホ不充分ノ憾ミナシトセズ。殊ニ其ノ伝染源タル病原体保有者ノ検索ニ関スル報告モ亦、極メテ少数ナル誠ニ遺憾トス可ク、特ニ国軍ニ於ケル該報告未ダナキニ鑑ミ、余等ハ一ハ国軍防疫上ノ見地ヨリ、一ハ北野教授ノ満州国ニ於ケル保菌者ニ関スル調査研究ノ一分野トシテ、畏クモ皇帝陛下、中央陸軍訓練処臨幸イ先立チテ、コレガ防疫上ノ万全ヲモ期ス可ク本年四月ヨリ八月ニ亘リテ、細菌性赤痢、あめーば性赤痢、池腸内細菌ニ関スル病原体保有者ノ検索並ニ調査研究ヲ試ミシニ甚ダ興味アル成績ヲ得タリ。ヨツテ茲ニ報告セントスル次第ナリ。

第二章 検索時期、被検索者並ビニ検索方法

一、検索時期—康德五年四月ヨリ同年八月ニ至ル迄五個月間赤痢ノ発生ハ主トシテ夏ヨリ秋ニ亘リテ多発スルニ鑑ミ、之ガ発生ニ先立チ、其ノ防濁方策ヲモ兼ヌル目的トヲ以テ本検索ヲ実施セリ

二、被検者—奉天中央陸軍訓練処、学生、兵徒、兵 内訳左ノ如シ

1 官長(学生)

甲種学生、乙種学生、派遣学生

以上 二四七名

2 生徒

日系軍官候補者、満系軍官候補生、少尉候補者

以上 一九六名

3 兵 各今日導隊士兵

七六四名

合計 一二〇七名 [中略]

第三章 検索成績

以上ノ方法ヲ以テ被検者一二〇七名ニ就キ赤痢保菌者赤痢あめーば保有者ノ検索ヲナセシニ次ノ如キ成績ヲ得タリ

第1節 赤痢菌

- 一、保菌者発見数ハ三一名ニシテ被検者総数ニ対シテ二・五六%ヲ占ムルヲ見ル。
- 二、コレヲ兵科別ニ見ルニ、歩兵ノ一八名(一・四九%)、騎兵ノ八名(〇・六六%)、砲兵ノ五名(〇・四一%)ナルヲ見ル(第一表)。
- 三、更ニ階級のニ見ルニ兵ニテハ二四名(三・一四%)ヲ、候補者(生)ハ四名(二・〇四%)ヲ、官長ハ三名(一・二一%)ヲ示セリ(第二表)。
- 四、検出赤痢菌ニ就キ興味アルハ志賀菌ノ最多数ニシテ二名ヲ算シ、保菌者総数ノ三八・七%ヲ占メシ事ナリ。猶ホ、Y型二名(三二・二%)、F型八名(二五・八%)ア他ニ大原菌ノ一例ヲ見タリ。更ニ階級別ニ見ルニ、兵ニテハ志賀菌最モ多ク其ノ保菌者ノ半数(二〇名)ハ志賀菌ナルハ興味アル点ニシテ、F型、Y型ホボ同数ナリ、猶ホ大原菌ノ一名ハ兵ノ保菌者中ニ発見サレタリ。下士官ニ於テハ同様ニシテ志賀菌ガ最多数ヲ占メルモ、候補者(生)、官長ニ於テハ志賀菌ノ一名モナキハ注目ニ値ス可ク、又官長ノ保菌者三名ハ悉クY型ナルノ現象ヲ呈セリ。(以下略)

口 日本陸軍軍医団におけるイベカ吐劑(吐根)常備

出典…『軍医団雜誌』(滿州帝國軍医団)第二号、甲徳五年(一九三八年)七月一日。一〇三一—二五頁。

陸軍衛生工廠長 阿部 要治

陸軍衛生工廠長 阿部 要治

小生昨年九月当廠ニ着任以來衛生方面殊ニ衛生材料ノ指導教育上徹底ヲ要スルモノ頗ル多キ事ヲ痛感シ微才其ノ職ニ非ワザルモ出来得ル限り衛生部各官ノ知識ノ向上ニ資ニタク、先ヅ以テ卑近ノ事項ヨリ詳述スルヲ必要ト思ヒ、茲ニ康德二年一月三十非軍政部訓令一六八医行字六〇衛生材料規則第三表隊用藥物ノ応用ニ就テ小官日本陸軍在職中並ニ承德駐劄第七師団陸軍軍医部勤務中調整シ各部隊ニ配布セルモノ及ビ第九師団軍医分団ニ於テ隊治療參考資料タラシムル目的ヲ以テ配布セルモノ等ヲ參考トシ逐次記載セントス。

各官ニ於テ衛生材料ニ関シ多少ノ參考タリ得レバ小官ノ幸トスルトコロナリ〔中略〕

一 内 科

去 痰 鎮 咳 劑

- 1、ドーフル散錠三箇(一・五)、一日量三回食後服用
 - 2、ドーフル散錠二箇(一・〇)、重曹錠二箇(一・〇)、以上混和一日量三回食後服用
 - 3、吐根錠三箇(〇・三)、一日量三回食後服用
 - 4、ドーフル散錠二箇(一・〇)、コデイン錠二箇(〇・〇六)、以上混和一日量三回食後服用
 - 5、吐根錠三箇(〇・三)、葎草錠三箇(〇・〇六)、一日量三回食後服用
 - 6、吐根錠三箇(〇・三)、コデイン錠二箇(〇・〇六)、葎草錠三箇(〇・〇六)、以上混和一日量三回食後服用
- 作用 (1) 根ハ少量(嘔吐量1/5—1/10)ニテ気管支分泌ヲ増加シ気管支菌ヲ弛緩シ痰ノ喀出ヲ容易ナラシム

(2) ヨード及重曹ハ溶解性去痰劑ニシテ喀痰ヲ溶解シ喀出ヲ易カラシム

(3) 阿片、コデインハ中枢性ニ咳嗽反射機能ヲ減退シ鎮咳ノ効アリ

適応症 1 2 3 喀痰ハ少量且粘稠ナル場合 4 6 ハ粘稠痰ト共ニ咳嗽多キ場合 5 吐根ヲ服用シ悪心嘔氣アル場合

[中略]

催吐劑

一般禁忌 心臟病、動脈瘤、高度ノ血管硬化症アルモノ腦出血、喀血又ハ腸穿孔ノ恐れアルモノ

1、吐根錠 二―一〇箇(〇・二―一・〇)頓用

作用 大量ノ吐根ハ胃粘膜ヲ刺激シ二〇―三〇分ニシテ吐カシム

2、膽礬(硫酸銅) 〇・五、爲五包毎十分一茶匙宛服用

3、膽礬 一・〇、水 五〇・〇毎十五分一茶匙宛服用

4、吐根錠 一〇箇(一・〇)、膽礬 〇・五、水 三五・〇毎十五分一茶匙宛服用

作用 服用後五―一〇分ニシテ吐ク

適応症 特ニ礬(猫イラズ)中毒ニ用フ

注意 催吐劑ハ目的ヲ達スレバ服用ヲ中止スベシ

5、アポモルヒネ液 半筒―一筒、皮下注射

作用 中枢神經ヲ刺激シ注射後數分ニシテ吐ク(中枢性催吐劑)奏効最モ迅速確實ナリ

適応症 意識消失又ハ自殺者ニシテ内服胃洗滌共不能ナル場合